



# 日肢療連 第20号

日本肢体不自由児療護施設連絡協議会 発行

社会福祉法人兵庫県社会福祉事業団  
編集者 障害児入所施設おぞらのいえ 田中哲也  
兵庫県神戸市西区曙町 1070



## 「日肢療連のはじまり」

日本肢体不自由児療護施設連絡協議会は、平成8年1月8日に設立しました。

旧児童福祉法の施設種別である肢体不自由児療護施設は、全国的にも数が少なく、他施設との交流はほとんどありませんでした。時代のニーズも少子高齢化が始まり、障がいの重度重複化、被虐待児童の増加等、入所理由も多様化していました。一人ひとりの肢体不自由児の命と生活を守り、療育を目的とする施設の今後のあるべき姿、方向性を協議会の活動を通じて明らかにしていき、施設間の連携を強めていくことを目的としました。現在、神奈川県精陽学園、静岡県ねむの木学園、大阪府四天王寺太子学園、兵庫県おぞらのいえ、山口県はなのうらの5施設が加盟しております。

日肢療連は、令和7年1月で29周年を迎えました。

## 「より良い家庭的な環境って？」

会長 野田 栄次

この表題は、「より家庭的な暮らしとは何だと思えますか？」と、静岡大会の基調講演で岡崎氏から参加者全員に問いかけられました。すぐに答えることが出来ませんでした。

家庭で適切な養育を受けられない社会的養護が必要な子どもにとって、心身ともに安全で安心して生活できる家庭の代わりに機能する家庭的な環境、愛情を受けられ愛着が形成される環境、最善の利益を尊重される環境とは、どのような環境なのでしょう。

これからの障害児入所施設の在り方において、基本的視点と方向性が挙げられ、現在その機能強化や質の向上が求められているところです。

岡崎氏は言う、「アタッチメントと障がいでストレスの状態像の子どもたちが出てきた。障がいのある子はより手厚い支援が必要で、そういうことを発信していただきたい」と。

## ねむの木学園は「お家」

ねむの木学園やさしいお家  
園長 野田 栄次

ねむの木学園は、宮城まり子がつくれた日本で初めての障害のある子の養護施設として認可された、「病院ではない」社会的養護の必要な子どもたちも暮らせるお家です。

まり子学園長は、開設当初から子どもたちの家庭的な雰囲気大切にしてきました。



ねむの木学園のお母さんと

例えば、お茶碗やお湯のみです。そこには子ども一人ひとりにちよつとした「あたりまえの生活」がありました。

現在は実際にお店に出かけて買い物を楽しむ機会が増えましたが、当時は車で園外に出るのも大変な時代でした。そこで「子ども売店」というものがあって、子どもたちの要望があればお店を開いていました。売店は子ども自らが店主になって職員と一緒に園外のホームセンターなどに買い出しに行くという実践的なもので、生活機能としての役割がありました。

お小遣いからお金を出して買うの

ですから大切に使います。でも洗い場で職員が割ったりすることがちよくちよくありました。落としたら割れる瀬戸物でしたから。割った職員は子どもに謝り、報告してから学園で弁償していました。子どもたちはやさしく、けつして怒りませんでした。子どもたちにとつて売店の存在は非常に大きく、無くてはならないものだったと思います。

また、紙の上で計算ができない子が本物のお金に触れることで計算できる姿があったりして、「すごい」と驚かさされた事もありました。

子どもたちは自分で考え、自分の意見を言つて、子どもたち同士で話し合い、自分たちのことを決めていく。今も当時から変わらないものがあります。

大黒柱だった「お母さん」は、もうすぐ生誕百年を迎えます。

## 「じゃが芋畑」



精陽学園  
園長 市川 進治

毎年、生活の話し合いを行う「こども会」や一人ひとり自分の考えを伝えてくれるこども等から、様々な要望があがり、考えなければならぬことがたくさんあります。

ホール(別棟)の使い方では、「車いすから降りて、寝転がりたい」「読書したい」「ぬりえや折り紙したい」「ダンスの練習がしたい」「ミニ虫をつなげてほしい」等の希望があがり、静かに過ごせる環境が必要なのだと感じました。

栄養士を交えた食事の話になるとリックエストメニユーがたくさん上がりました。「トースターで焼いた食パン」「おむずび、焼きおにぎり」「カレーパン」「フレンチトースト」「宅配ピザ」「お寿司」「ロコモコ丼」「揚げパン」「ケンタッキー」等々、時間の限り、終わりのない話です。

他には、「個室がほしい」「一人になれる場所がほしい」「スマートフォンがほしい」「自分のコンサートがほしい」「行事のお手伝いがしたい」「シートのゴムが切れているので直してほしい」「アルバイトしたい」「こども同士のトラブルをなくして、優しく明るい園にしたい」等、自分のことばかりではなく、他のこども達のことでも考えてくれる意見も増えてきました。

職員側は、こども達の意見を聞き、出来ることから取組みをはじめました。家庭で用意してもらえない場合のみ使用できていたスマートフォンを必要に応じて施設負担で提供できるようにしました。個室がほしいことに関しては、一部のお部屋にパーテーションを立てつけることにしました。アルバイトでは、Mファーストフード店に面接に行きました。

## 地域とともあるために



四天王寺太子学園  
園長 成澤 佐知子

大阪府南河内郡太子町は一万二千人ほどの小さい町です。4kmほど東に走れば奈良県に入る大阪府の南東部にあります。中学は一つ、小学校は二つ、太子学園の児童が通う方の小学校は一学年一クラス。太子学園の周りには住宅がなく、いわゆる「近所さん」は、他種別の施設が二件あるのみです。

社会福祉法人制度改革において、社会福祉法人は地域ニーズに率先して対応していくこと、自らの存在意義を発信していくことが求められました。短期入所や日中一時支援のご利用は、年々増加にあります。特に短期入所は、ご希望も多く土日ほぼほとんどといった状況で、少しはお役に立てられているかと思いますが、ご利用は広範囲からです。太子町という地域への還元については、あまりできていない状況ではないかと思っています。太子学園は、この「地域とともにあるために」何ができるか、をこの数年模索している

ところです。

それでも「少しずつ、できることをやってみよう」と、職員が意見を出し合って進めています。令和六年度に児童が行った太子町内の高齢者宅に配食するボランティアが好評で、社会福祉協議会ともかわりを深める事ができ、今年度は町中に配置する募金箱づくりにも参加いたしました。新たに、町内の認定こども園に通う子どもたちとの交流会も企画し、ゲーム大会をして良いひと時を過ごすこともできました。

小さな町ではありますが、小さな町の良さがあります。「あんなことできるかも」を大切に、地域の皆さまとともにあるために太子学園のできることを実行していきたいと思えます。

## 「家族支援の充実」

### 「支援者の役割と専門性」



はなのうら  
園長 吉村 妙子

はなのうら園長に着任して早いもので一年が経とうとしています。日枝遼連の施設の皆様今後ともよろしくお願ひいたします。

さて今年度、はなのうらでは児童発達支援部会研究会で講師をお招きし、「障害のある子どもと共に生きる家

族への支援」支援者の役割と専門性」をテーマに研修会を開催しました。第二十三回日枝遼連全国大会では、各ライフステージにおける発達目標の達成と自立支援には、家族との協働、家族を含む包括的な支援と連携アプローチが必要であることを学んだところであります。障害のある子どもを支援するということは、その家族を支援するということでもあると言えます。障害のある子どもが健やかに成長するためには、家族がゆとりを持って生活することが大切です。支援者は家族との相互理解を深め、子どもの発達や育児に関して、共に考え行動するよう努めることが必要です。更に、研修等

自己研鑽に励み、家族に対して相談援助や養育力向上の支援ができるように資質向上を図ることも重要と考えます。今回の研修を通して、家族と支援者が信頼関係のもと、(ひとりではない)つながりの中で育てる仲間という存在であり続けることを学びました。また、他事業所と支援者としての現状と課題や困り感を協議・共有したことで気づきを得られる機会にもなりました。

今後とも障害児入所施設の役割として、家庭的な養育環境の確保と専門的な支援の充実、成人期に向けた移行支援の強化を図り、子ども達が自分らしく成長できるように安心して安全な暮らしを送れるように支えていきたいと思えます。

## 一年を振り返って



おおぞらのいえ  
所長 田中 哲也

おおぞらのいえ所長に着任し、一年が経とうとしています。

私自身、これまで経験したことのない障害児入所支援・児童発達支援分野であったことから、これからやっていくことへの不安を感じながら、四月を迎えました。

加えて、当おおぞらのいえを含む、十の医療及び福祉施設等を統括運営する「総合リハビリテーションセンター」の経理担当課長の役割も担うこととなり、どちらかといえば経営面における視点で運営に携わってきたように思います。

図らずも二足のわらじでスタートしましたが、与えられた職責に対し、そのメリットを模索しながら取り組んできた一年であったように思います。

経理担当としては、当施設はあくまで十ある施設の一つであり、センター運営全体の中において、県指定管理施設「おおぞらのいえ」の運営を捉えることとなります。限られた財源の中での職員配置、県立施設として先導的かつ効率的な事業運営について、机上で思案する時間が多くなり、ややもすると利用児目線の観察が疎かとなり、努めて施設に足を運ぶよう心が

けておりました。

現場経験のない施設長なので、職員や利用児には不安をお掛けしたと思います。支援現場においては、当たり前ですが、事務的な視点で解決できることはほとんどなく、また利用児毎の課題も常にレアケースなので、様々な議論を経て改善策を導きます。経営的で事務的な正論では計れないことは承知しつつも、やはり厳しい経営環境を考えると、ヒト・モノ(この場合「サービス」)・カネのバランスが施設運営の基本なので、そういった視点を理解してもらえよう努めて参りました。

経験がない上に普段施設にも居ないことで、施設運営にどの程度貢献できたか常に不安ではありましたが、努めて異なった視点で臨んだことで議論を深めることはできたのではないかと思います。

利用児たちは、日々多くのことを学び、経験しながら、一人ひとりそれぞれのペースで成長しておりますが、私自身も多少ではありますが成長を実感できた一年でした。

所長という職責の重大さには戸惑いつつも、現職責のメリットを活かし、スタッフと一丸となつて、利用する児童の皆さんや、そのご家族の想いを大切に施設を目指していきたいと思えます。

# 施設だより

あたらしいお家が  
できます



四天王寺太子学園  
坂野 博保

四天王寺太子学園の現行の建物は昭和四十七年に竣工し、五十三年が経過しました。現在の施設では、子どもの生活スタイルに合わない点や設備の老朽化、支援環境の限界が顕在化しています。令和七年には、新たに小規模ユニット型の施設が完成し、三十名の子どもたちが新しい環境に移行する予定です。新施設は戸建て平屋四棟で、三棟が八人のユニット、一棟が六人のユニットとなります。また、残る子どもたちには、現行の建物を改修して、より落ち着いた生活ができるように環境整備が行われる予定です。

障害特性の多様化、特に発達障害児への支援強化は喫緊の課題です。虐待を受けた子どもの割合が八割を超えており、トラウマや愛着形成に課題を持つ児童への心理的ケアの充実も求められています。少人数

での生活環境では、職員が子どもたちの思いをしっかりと受け止め、その実現に向けてサポートします。思いが叶わない場合も、その理由を丁寧に説明し、子どもの理解力に合わせ納得できるまで伝えることを大切にしています。こうした支援を通じて、子どもたちが成長し、安心して暮らせる環境づくりを目指しています。



建設中の新ユニット

## プラスポーツ体験!!



おおぞらのいえ  
松本 優紀

おおぞらのいえがある総合リハビリテーションセンターには兵庫県立障害者スポーツ交流館（体

育館）が併設されています。そこでは、年間を通して『ボッチャ』や『卓球バレー』『車いすバスケットボール』等、様々なプラスポーツ体験教室が開催されており、おおぞらのいえからも希望する子どもたちが参加しています。ボッチャ教室には、これまで何度も参加しており、子どもたちもルールを理解し楽しむことができています。一般の方に交じって、職員ではなくスポーツ指導員の方に指導してもらうことで、子どもたちも緊張感を持ち、より真剣さが増すように思います。日常の生活では、見られない子どもたちの新たな才能や一面が発見できたり、回数を重ねるごとに上達する喜び、試合の緊張感、勝負の悲喜こもごも、スポーツでしか味わえないことを体験できたりする貴重な機会となっています。身体障害のある子どもたちがスポーツに挑戦できる機会が限られている中で、おおぞらのいえの利点を生かし、これからの子どもたちがスポーツの楽しさや身体を動かす楽しさを感じられるよう取り組んでいきたいです。

## 生教育系の取り組み



精陽学園  
岩崎 さくら

私は、今年度初めて生教育係になり、担当職員として生教育に携わってきました。職員として教える立場でありながら、子ども達と一緒に私自身も学んでいく、そういった気持ちで臨みました。

精陽学園では、「人と共に生きるための教育」を主な狙いとして行っています。生教育からできるアプローチは幅広いですが、今年度は『楽しい』が根本にある取り組みを考えることを大切にしています。座学の



卓球バレーと車いすバスケット

様な学びの機会も大切ですが、楽しむ中で『学び』があり、それぞれの気付きがあれば良いなと思っています。

具体的には、『相手のことを思い考え、ケーキを選ぶ』という取り組みを行いました。この取り組みには、「相手に喜んで欲しい」という自身の根底があり、相手が喜ぶ等の反応がまた自分自身に返ってくることを実感することができます。自分ではない誰かの為に想い巡らす経験をするのは、人と共に生きる力を育む上で大切だと考えます。

初めて生教育係をしてみても、正直とても難しいと感じています。それでも、子ども達の新しい一面を知れることが楽しい、面白いと感じることも多く、貴重な経験になっていきます。生教育は、障害の有無にかかわらず、生きていくうえで欠かせない学びなので、今後も真摯に向き合っていくと思います。



## みんなで頑張ったクリスマス会



はなのうら  
花岡 博子

「福祉型障害児入所施設はなのうら」には五歳から十八歳までの児童が入所しています。コロナが五類となりご家族を招待しての行事も企画できるようにになりました。

その中で、今年度十二月十四日クリスマス会が開催されました。久しぶりに子ども達の成長を見てもらえる楽しい機会。二か月前から職員も一緒にはりきって準備を始めました。

ステージ発表では歌とダンスを披露することにし、子ども達が好きな『ツバメダンス』『ジャンボリ・ミッキー』『マツケンサンバ』の三曲を選曲。さあ、練習開始！しかし最初は、飽きてしまつて不貞腐れる子、しかたなく付き合っている子等まともありませんでしたが、職員が一緒に踊ると子ども達の士気が一気に上がり、すごいパワーで練習に身が入りました。勿論、職員は子ども達の登校後、就寝後など時間を見つ

けては猛特訓(笑)

本番当日、ご家族の前で緊張した面持ちの子ども達。それを見て、職員も緊張！音楽が始まると子どもも大人も自然に体が動き出す感じに！子ども達のご家族の声援を受けるとさらにステップ軽く踊り出し、一丸となったステージ発表は達成感満載でした。

さあ！次はどんな楽しいことを考えようかな！？



## ねむの木大運動会



ねむの木学園  
やさしいお家  
岡野 圭祐

十月二十七日に、「ねむの木大運動会」が行われました。コロナ禍もあり、中々お客様をお迎え出来ませんでした。五年ぶりにお越しただくことができました。ねむの木学園の運動会は、今回で五十七回目でした。普段の授業から芸術活動に力

を入れており、歌やダンスを中心に披露しました。練習や準備はとて大変でしたが、こどもたち、職員が協力し、「お客様に喜んでもらいたい」という気持ちで頑張りました。昨年はパリオリピックがあり、こどもたちもテレビを観ながら選手たちを応援しました。

運動会の障害物競走ではパリの街をテーマにして、凱旋門、エッフェル塔、セーヌ川など、みんなで協力して作りました。ダンスや歌もたくさん拍手をいただきましたが、こどもたち全員で行う「こどもりレー」もとても見応えがありました。自分で走れる子、職員と一緒に走る子、車椅子の子など、一人ひとりが「自分の精一杯」を出して全力で走りました。たくさん練習をして、本番ですべてを出せた子どもたちはみんな笑顔で、やりきった表情でした。また来年運動会ができるように、こどもたちは日々頑張っています。



## 第24回日肢療連全国大会 静岡大会」を終えて

ねむの木学園やさしいお家  
園長 野田 栄次

はじめに、本大会が開催出来ましたこと、ご参集いただきました皆様、衷心より感謝いたします。

本大会は、こどもが孤独や孤立化しない社会、こども自身が安心・安全に思える「居場所」がある社会になるためには、どのような取組が求められるのか、「こどもたち一人ひとりの居場所がある社会に！」と自分一人じゃないく」をテーマに開催されました。

静岡大会は、ねむの木学園のある掛川市内で二日間にわたり、日本肢体不自由児療護施設連絡協議会（通称日肢療連）加盟五施設の代表が一堂に会し、十四年ぶりに行われました。

掛川市は、平成六年に日本初の本格木造天守閣として復元された掛川城やお茶処としても知られており、日本の「まんなか」にあります。市政では、「こみ少ない」ランキングで全国一位になったことがある美しい街づくり等、長年環境整備にも力を入れていきます。

開会式では、日肢療連の表彰要綱の規程により、ねむの木学園の事務職員と保育士一名ずつが表彰されました。職種は異なりますが、十年から二

十年以上、勤務してくれている職員二人です。

基調講演は、昨年の山口大会に続き、こども家庭庁支援局障害児支援課移行支援専門官の岡崎氏をお招きし、「これからの障がい福祉施策」と題して、ご講演をいただきました。

自己紹介の中で、岡崎氏がこども家庭庁に入庁される前のことをいくつかお聞かせていただき、親しみを感じる素敵なお話でした。

子どもたちの居場所では、「子ども自身がどう思っているのか」が大事で、子どもの意見を聞く側も一人じゃなくて、みんなで寄り添って考えてほしいんですね、と言う。

こども家庭庁では、こども大綱やこども基本法に基づき、政府全体でこども施策を推進していることや基本理念に触れ、そこにどんなメッセージが込められているのかなど、こども政策に関する重要事項についての話から、山口大会で少し解説をいただいた「こども未来戦略（障害児支援関係）」等、わかりやすい言葉でご説明をいただきました。特に「社会的養護、障害児・医療的ケア児の支援基盤の充実」にも力を入れていけると言う。

「障害児入所施設の在り方」では、基本理念として、地域社会へ参加・包摂（インクルージョン）の推進と障害の有無にかかわらず、全てのこどもが安心・安全に暮らせる社会の実現を目指し、障害児入所施設が中核的機能の

役割を担えるには、地域における連携体制を強化し、サポート事業として、そのサポート職員が直接自治体に巡回して必要な助言や援助を行うことも出来るようになっていく。

また、「障害児入所施設が今一度、地域の家族支援において、家族や子育てを支えていく」ということを考えた時、どのような役割を果たせるのかというご意見をいただきたいとございました。基調講演では、たくさんの宿題をいただき、これから日肢療連のさらなる

継続的な実践が重要だというお話をいただきました。



続いて研究発表です。精陽学園は、「会うから逢うへ」〜三日里親とのかわりから見えてきたもの〜と題し、会いに来てくれる人が、子どもにとって「逢いたい大切な人」に変わっていく様子がよく伝わってきました。

四天王寺太子学園は、「事例報告」〜暴言暴力のある児童への対応〜と題し、こどもの意思や気持ちに寄り添い、施設と子ども家庭センター、病院等が一体となって、職員全員で取り組んだ実践的な内容でした。

四天王寺太子学園のチームワークが素晴らしかったです。

はなのうらは、「こどものやりたい!! できた!! に寄り添う支援」〜小規模グループ加算について〜と題し、少数グループケアにより、家庭的な雰囲気の中で、自立に向けた生活面等の細やかな支援ができていくこと、子ども同士、職員とのコミュニケーションや地域の人たちとの交流があり、楽しんでる様子が写真からも伝わってきました。

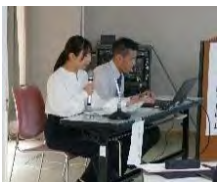
この研究発表は、子どもたちに寄り添った支援をされている施設の取り組みの一部を知ることが出来る貴重なものばかりでした。

第一分科会では、岡崎氏にご参加をいただき、社会的養育の推進に向けた取組において、「都道府県社会的養育推進計画」の中で「より家庭的な生活を進めていく」が書かれていること、里親委託の推進、ファミリーホームの設置運営の促進等、こども家庭庁の取組状況のお話の他に各施設の様子など情報交換をすることが出来ました。

第二分科会では、「休日の過ごし方」〜一時保護、入所児の受け入れの対応〜について議論されました。入所の背景にある支援の難しさを共有し、今後の課題として持ち帰りました。

閉会式では、大会決議を採択し、次回開催施設の「おおぞらのいえ」につなげることが出来ましたこと、心からお礼申し上げます。

昨年の「山口大会」に続く、大変有意義な大会だったと実感しております。



## 施設長会 令和六年度の取り組み

事務局長 市川 進治

事業計画に基づき、令和六年度の予定をすべて実施することが出来ました。施設長会議は、オンライン会議五回を含めて合計七回実施しました。施設運営における情報交換、基礎調査の実施、子ども家庭庁からの情報周知及び要望書の作成等の検討を行いました。

日肢療連の共通の課題は、より良い療育・支援体制を作るための人材確保と人材育成及び人員配置の増強です。一人ひとりの成長に寄り添った療育・支援、子ども達の希望を叶えることや将来に備えた社会経験の積み重ね等、配慮すべき事柄が沢山あります。そのために、行政に対しては、療育・支援の充実を図るための要望を継続的に検討しました。

日肢療連の活動は、施設間の連携を深め、現状を見直す良い機会となっています。小さい団体ではありませんが、全国大会、交換研修、各種会議等を通して、とても有意義な活動となりました。



## 児童発達支援管理責任者 連絡会を行っています



精陽学園  
児童発達支援  
管理責任者  
小池 俊

日肢療連では、昨年度から加盟五施設の児童発達支援管理責任者等の連絡会をリモートで開催しています。

二年目の今年度は、開催頻度を昨年度の年一回から年三回に増やし、様々な議題について意見交換をしています。個別支援計画の作成や評価の方法はもちろんの事、権利擁護や職員育成、対外的な関係機関との連携、家族支援について等、内容は多岐に渡ります。

例えば、個別支援計画の策定一つとっても、計画を立てる上で何を大切にするか、どのような手段で進めていくか、どのようにご家族と共有し協力し合うか等、施設ごとに特色と違いがあり、参考にしたい考え方がたくさん出てきます。さらには、最新の障害児福祉の施策や制度についても触れ、意思決定支援や家族支援、子どもの意見表明、移行支援の視点等をどのように個別支援計画に落とし込むか等、内容についてもより広く、より深いものになっています。

関係機関との連携方法についても地域によって違いがあり、出てくる話

一つひとつが参考になる事ばかりです。

普段から、それぞれの地域で開催される児発管の研修会には参加できなくても、同形態の施設の児発管同士で意見交換をする機会はなかなか持てず、「相談できる人がいない。」「教えてもらえる人がいない。」という中、孤軍奮闘してきたところもあります。

このような連絡会という機会があることで、悩みや躓きを相談し、話し合える機会にもなっており、その繋がりが「一人じゃない。みんながいる。」という心強さにもなっています。

立ち上げてまだ二年ではありますが、回数を重ねることで「顔馴染み」にもなり、緊張感なくざっくりばらんな意見交換ができるようになってきたと思います。回を重ねる度に、笑顔も増え、闊達な意見交換の場となっています。

参加されている方々の積極的で前向きな気持ちのおかげです。いつもありがとうございます。

今後は、リモートではなく直接顔を合わせて連絡会をする機会が持てたら良いなと思っています。時間の許す限り、いろいろなテーマで意見交換し、それぞれの施設の書類を見比べ意見交換ができたらと考えています。同じ役割同士、きつと話には尽きないと思います。

## 職員交換研修

四天王寺太子学園 坂野 博保

日肢療連では職員交換研修として、五日間、日肢療連内の他の施設にスタッフの一員として勤める、体験的な研修を実施しています。本研修の趣旨は、以下の三点に集約されます。

第一に、違う施設の運営方法や文化を知ること。施設ごとの運営や文化を体験し、比較することで新たな視点やアプローチを得る機会となります。これにより自施設の業務改善のヒントを得られます。

第二に、業務改善のヒントを得ることです。他施設の業務の進め方や成功事例を学ぶことで、自施設に役立つアイデアを得ることができます。異なる環境での取り組みを実体験することで、より効果的な方法を自施設に取り入れることができます。

第三に、職員の成長とモチベーション向上を期待しています。新しい環境での経験は、参加した職員の成長に繋がります。他施設の取り組みに触れることで、自分の仕事に対する意識が高まり、モチベーションの向上が期待されます。

今後この研修が皆さまの成長と施設間の連携を深める貴重な機会となることを願っております。

## 職員交換研修 参加者の声



精陽学園  
伊藤 静香

精陽学園へ入職して八年目、交換研修のお話を頂いたとき、あまり積極的な性格ではない自分が違う場所で学び、過ごすことが出来るのか想像が付きませんでした。

研修先を決めていく中で、兵庫県の「おぞらのいえ」に興味を持ち、希望をさせていただきました。

今回の研修では精陽学園との違いや子どもたちとの関わり方、個別支援計画についてなどを情報共有したいと思っていました。職員の方とは、衣類や便などを異食してしまう子に対して、どんな対応をしているか話す機会があり、精陽学園ではこんな対応をしているなど、同じ悩みを共有するところができました。また重度の子への個別支援計画を作成する際に、悩むことが多く、どのように作成をされているのか相談をさせて頂きました。実際に個別支援計画も見させて頂きましたが、何が出来るのか、将来に繋げていけそうか、いろんなお話を聞かせて

頂き、今後の作成に活かしていきたいと思いました。

精陽学園で過ごしていると、毎日バタバタと時間が過ぎるのが早いと感じる時があります。職員の皆様からは、数年前は年齢の高い子たちも知的の高い子が多く、年齢の低い子たちとも関わる時間が多く持っていたが、今は逆に年齢の高い子たちも重度化してきた影響もあり、年齢の低い子たちと関わる時間が少なくなってしまうと伺いました。人数ですが、子どもたちの雰囲気も変わっていく中で、同じような悩みを抱えているんだなと知りました。日常生活の中で、どのような時間で子どもたちと過ごしていくのか、その中でどんな関わり方が出来るのか、今後の課題でもあると感じました。

子どもたちはみんな素直で可愛らしい子も多く、初対面でも「遊ぼうよ！」とたくさん話しかけてくれました。精陽学園の子供たちとは違った一面もあり、楽しい時間を過ごさせて頂きました。また職員の皆様とも、たくさんお話をさせて頂き、とても貴重な経験になりました。

今回の研修で学んだことや経験したこと、今後の子供たちとの関わりや自分自身の働き方に活かしていきたいと思えます。



はなのうら  
室岡 拓磨

私は以前華の浦(成人施設)の方で三年勤務しましたが、児童棟に異動して間もなく、日常の過ごし方や肢体不自由の児童に対する関わり方、姿勢等を学びたく、今回の交換研修に参加しました。

はなのうらは、成人施設と比べて肢体不自由の児童が少なく、言い訳になつてしまいがちですが、目が離せない児童を優先的に支援せざるを得ません。そのため肢体不自由の児童の支援が疎かになることが多くなることから、成長途中における支援の方法や日頃どのような活動を知りたく思い研修先は「おぞらのいえ」を選びました。

「おぞらのいえ」は総合リハビリテーションセンターの敷地内にあり、専門的な職員や設備が充実していて、その児童に合わせた支援を行うことができます。訓練方法は、立位訓練や歩行訓練等様々ですが、児童が積極的に訓練に参加しており、職員の言葉掛けや支援でこうも違うのかと大変勉強になりました。「支援とは本人をその気にさせることが大切」との言葉を受け、はなのうらでも実践していきたいと思えます。この度は、貴重な体験をさせて頂き、ありがとうございました。



四天王寺太子学園  
城田 拓夢

今回の研修では、個別支援の取り組みや視覚支援の方法など、主に支援のあり方についての学びを目標に設定しました。

精陽学園では肢体不自由児が多く生活しており、更衣や排泄には介助度も高く、知的障害を抱える児童が多く生活する太子学園と、求められる職員のスキルが異なることを強く感じました。

介助に関しては、衣類の選択や食事の順番を職員が決めるのではなく、児童の嗜好を確認し、選択してもらい、児童主体の支援を行うことが求められていました。このような指導をいただき、自身の不足していたスキルを学ぶことができました。

今回学んだ知識や技術を活かし、日々の業務に取り組みでいきたいと考えています。

## 編集後記

日肢療連の連帯感と、加盟各施設の特徴がこの機関紙に表現できたらと思ひ編集しました。年度末のあわただしい中、記事を執筆してくださった皆様には感謝申し上げます。(編集担当)